

■ウィンド Etc. (風のエトセトラ)

テヘランの風 —再エネワークショップに参加して—

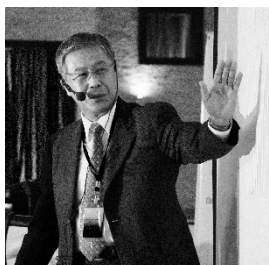
(一財) 新エネルギー財団 国際協力部長 永尾 徹

5月の中旬にイランのテヘランを訪問する機会があった。東京に本部を置く国際機関アジア生産性機構(APO)と、イラン政府が共催した4日間の再エネ(風力、地熱、太陽光)ワークショップに出席したもので、アジア15カ国の政府からエネルギー政策担当者約50名が参加した。東南アジアと日本以外からはモンゴル、インド、フィジー、ネパール、パキスタン、バングラ、イランが参加し、国際色豊かなワークショップとなった。筆者の役目は5時間の風力の講義を行うことで、事前の膨大な講義資料作成に苦労したが、その分得られたことも多かった。



参加者集合写真

ワークショップでは再エネの講義に加えて、参加者から各国の状況が報告された。そこでは導入計画、政策と共に障害が具体的に示され、同じアジアにある我が国が協力できる事項が多くあることが分かった。歴史上初めて風車を利用されたといわれるペルシャ=イランの風力エネルギーは既に180MWが導入されており、近々5GWまで増加させるという凄まじい計画を持っているが、風車の調達をはじめとして多くの問題がある。制裁対象国イランに対する欧米の出足は鈍く、その分日本の役割は大きいと思われるがこれらについては機会を改めて報告したい。



苦戦する筆者と舌鋒鋭く迫るイラン政府担当者

さて、イランはイスラム革命、核開発疑惑、経済制裁といった負のイメージが強かったが、訪問した後は全く違った印象が変わった。ドバイからペルシャ湾を渡り延々と続く砂漠を2時間飛ぶと、忽然と近代的大都市テヘランが現れる。そこは標高1200mの高地で周りを3000m級の山に囲まれ、遠くには標高5610mの真白な山が霞んで見える幻想的な雰囲気、遙か遠くペルシャの街に着いたと実感した。街は清潔で落ち着いており、活躍する女性の姿が印象に残った。東南アジアの国々では、女性が国際会議の準備、運営、司会まで活躍することは普通に見られるが、今回のワークショップを仕切ったのもイラン政府の女性達で、運営から司会まで手際の良さには感心した。イランの女性は男性より優位にあるようで、男性は逆に柔和に見える。その女性達は皆ペルシャ美人と言っても過言ではなく、証拠に街で撮らせて頂いた方々のスナップをご紹介します。



街で見かけたペルシャの淑女達

